

まんだら通信

第193号(通巻229号)

平成24年07月 西暦2012年 佛暦2578年 皇紀2672年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

あそか基金をお届けしました



首都コロンの近くの、ランボクナガマ成田山幼稚園に、半月ほどでしょうか、ご厄介になったことがあります。園長代理のような役割のアンギラサ師にお会いした時、お寺の日曜学校(二百人)の子供さんの中には、ノートなど学用品に不自由な子がいるという話を聞いて、『あそか基金』が生まれました。もう二十年余りになります。最初はピヤダルシャニという女の子が一人でしたが、二人になり五人になって、今では二十五人ぐらいになりました。私が手渡す日本円を、アンギラサさんが定期預金して、利息だけを払い戻し、奨学生に毎月五百ルピーずつ渡します。

基金などと大層な名前ですが、今回お持ちした分を入れて、漸く二百七万四千四百五十三円になったという、世

界一小さな教育基金ということに変わりはありません。それでも、心がけて下さる大勢の方々のお力があった、チリも積もればのことわざ通り、子供たちへの何よりの励ましになっています。希望者がまだまだ多い上、預金の利息が段々低くなっていますので、今後とも宜しくお力添えをお願い致します。普通、このような場合は経費がかかるもので、去年の東北の災害の義援金など、いくら集まってもどのように配分し、現在はこうです、という報告など聞いたことがありません。そのような中、私は勿論ですがアンギラサさんも、事務費など一切受け取らず利息はすべて子供たちのために使っています。



上の写真は、日曜学校の生徒さんの歓迎の様子。左は奨学生と親御さんと、基金のお世話をして下さる人達、総勢六十人への感謝の夕食会。下はランボクナガマ成田山幼稚園の子供たちと、持参したキャンディのプレゼントの様子です。



余滴

◆2年目のスリランカは、道路工事などインフラ整備が急ピッチでした。内戦状態が片づいて、平和になったことと大いに関係がありそうです。目出度いことではありますが、ダンプカーや大型土木機械などの導入で人手が要らなくなり、失業者が増えるなど難しいことも起きているようです。力仕事得意のゾウさんまで仕事がなく、観光客探しをしているとか。◆上の花売りの少年。七曲がりのいろは坂をバスが下っていると、ヤブの近道を必死で降りて次のカーブに現れます。その見上げた懸命さに敗けて買いました。15歳の中学生

だそうです。学資稼ぎをしているであろうこの子もそうですが、子供の瞳はみんな輝いています。◆今回は私たち夫婦の他、5人が一緒でしたが子供たちとの夕食会や『あそか基金』へのご寄付など、一般の観光旅行なら要らないお金を使わせてしまいました。恐縮しています。それにしてもアンギラサさん。今回も、お忙しいご自分の用事を1週間も放り出して、旅行者を急かせるホテルの手配や、一番安心できるバス探しの上に、お友達のアヌラさん共々付きっきりで、案内を買って出て下さいまし

た。而も到着時にはお友達空港職員を手続きなどの手伝いに頼み、帰りの座席はなるべく疲れないうように、エコノミー席の一番前を取るように、航空会社に頼んでくれました。そんなにまでされるほどのことは何もしていないのに、ただただ恐縮してしまいます。◆今月の野草は、前にも載せたことのある、鴨川市太海のスカシユリです。離れ磯の岩場に毎年決って咲きますが、頼りの土は植木鉢半分もありません。ユリにして見れば自然のことなのは、頭では分かるのですが、つい、己れの生き方に引き比べて「よくがんばって咲くねえ」と、尊敬の気持ちが先になります。 2012/07/08 龍渉



にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊

第七十八話 蒸気機関車

どうも、年齢のせいかな、最近、死亡記事について目が行きましてね。

芸能界では、昨年十一月の立川談志師匠に続きまして、今年に入りまして、二谷英明さん、三崎千恵子さん、淡島千景さん、安岡力也さん、新藤兼人監督、尾崎紀世彦さん……と相次ぎまして亡くなられておりましてね、特に、知り合いでもございませぬが、なんだかさびしい思ひになりますね。心よりご冥福をお祈りいたします。

昔から、一流の人というのは、亡くなる時までその様子が後世に残されるんですね。

たとえば、歌舞伎界で名人と呼ばれた六代目尾上菊五郎が息をひきとろうとした時に、ベッドの脇にいた弟子のひとりがワッと大声で泣き出したそうです。

すると、菊五郎、パチッと眼を開けまして、苦虫を噛み潰すような顔でその弟子に向かって言ったそうです。「まだ早い！ お前はいつだつて間が悪い！」。そして、安心したかのように、あの世に旅立っていかれたそうですから、さすが名人ですね。

漫画界の巨匠手塚治虫さんは、死の前、「隣の部屋に行くんだ。仕事をやる。仕事をさせてくれ」と叫んだそうですし、若くして亡くなったアナウンサーの逸見政孝さんは、意識が朦朧としたなか、「はい、三番が正解です」と言ったそうです。辞世の句を詠む人もいますね。私が好きなのは、十返舎一九。うまいこと書きました。

「この世をば どりやおいとまにせん香の煙とともに灰 さようなら」
というんですから。

辞世の句で最高なのは、大盗賊石川五右衛門でしょう。すごいですよ。京の五条河原で釜ゆでになる寸前に、こう詠んだんですから。

石川や 浜の真砂は尽きるとも 我泣きぬれて 蟹とたわむる

あれ？ ちがいましたか。石川ちがいでしたか。

私の師匠の三遊亭鳳豊は、亡くなった石原裕次郎さんのファンで、大変におしゃれですからね、先日私にこんなことを言っていました。

「鳳豊、いいかい、もし私が死んだらね、私の骨は、私が生まれたパリに埋めてほしい」

つて。何、気取っているんですか。生まれたのは、埼玉県の川越の、サツマイモ畑の近くじゃないですかねえ。さて、本題です。今日は、最近、お亡くなりになった元鉄道マンの話をしませう。

中野一郎さん（仮名）は、その昔、国鉄の東北本線を走る蒸気機関車の機関士でした。

「なんだ坂、こんな坂、なんだ坂、こんな坂」と聞こえたあの蒸気機関車、懐かしいと思う人は少なくなつたでしょうね。特に、地方を走る蒸気機関車は、田舎の茅葺の家の前を走つたりしますから、とても親しみが感じられましたね。中野さんの実家も東北本線の線路沿いであつて、家の近くに來ると決まつて「ポーツ、ポーツ」と汽笛を鳴らしたそうです。

娘の綾子さんは、子供の頃、「あつ、おちやんだ！」と、そのたびに庭に出て、お父さんに手を振りました。

そんなお父さんも退職し、家で農業をやる日々が続きましたが、晩年は病気が

ちになり、入退院を繰り返していました。そして、その日を迎えたのです。

お母さんは十年前に亡くなつていますから、父親には姉の美也子さんと綾子さんが付き添つていました。お父さんの一郎さんは、もともと寡黙な人だったので、「ありがとう」と言えずに、ただただ手を合わせて、感謝の気持ちを表していました。

その日もそうでした。
「父ちゃん、苦しいの？、お医者さん、呼ぼうか」。息が荒くなつたお父さんを心配した綾子さんがそう言うと、首を横に振つた一郎さんは「ありがとう」と手を合わせました。

綾子さんは、その手に自分の両手をかぶせました。すると、一郎さんは逆に綾子さんの両手を強く握つたのです。

その瞬間、綾子さんは、三十年近く前の自分の結婚式を思い出しました。実は、高校を出た綾子さんは、父親の反対を押し切り、東京に出ました。娘は実家の近くに置くべきだ」という強い信念を持つていた父親の一郎さんは、綾子さんが東京に行つてしまつたら、結局、東京で結婚し、東京に住んでしまふ。そうなれば、なにかつらいことがあつても、逃げて帰つてこれられないと思つたからでした。

若かつた綾子さんは、そんな父親に反発し、絶交状態になつてしまいました。そんな綾子さんが結婚することになり、お父さんの予想通り、東京で暮らすことになりました。

「頑固な父ちゃんだから、結婚式には行かないかもしれない」とお母さんやお姉さん、さらには親戚にも言われましたが、招待状だけは出しました。

結婚式当日、お父さんは来てくれませんでした。しかし、控室でもまわりの笑顔とは裏腹にまさに仏頂面でした。

（嫌だつたら、来ないでよ！）

ウエディングドレスを身にまとつた綾子さんは、心からそう思いました。披露宴でも、お父さんは黙つて酒を飲んでいきます。親戚の誰もがそんなお父さんを無視していました。

結婚式が滞りなく進み、最後の花束贈呈になりました。でも、花嫁の花束は、新郎の母親に渡されます。

綾子さんは、彼の母親に渡した後、お父さんの前に立ちました。花嫁が結婚前に花嫁の父にする挨拶をしていなかったことを思い出したからです。

「父ちゃん、いろいろごめんなさい。こまで育ててくれてありがとう！」

すると、それまで仏頂面だつたお父さんが満面の笑みになり、じつと綾子さんをやさしい目で見つめ、「がんばるんだぞ！」と言つて、それはそれは強く、綾子さんの手を握つたのでした。一郎さんの視線と綾子さんの視線が数年ぶりに交差した瞬間でした。

（ああ、あの時の力強い父ちゃんの手だ！）

綾子さんは、病室でそう感じました。それから、三日後、中野一郎さんは息をひきとりました。享年八十一歳。「がんばるんだぞ！」。あの力強い握手は、子供の頃から愛し続けた綾子さんに贈る、父ちゃんの最後の汽笛だったのかもしれない。

この人情小噺は月刊誌MOKU七月号からの転載です。最初の時、恐る恐る転載の許可をお願いしたところ、どうぞどうぞお使い下さい、書き直しても構いません。と鷹揚に仰つていただいて、ひたすら恐縮したことでした。
お言葉に甘えて、今月号ではホンの少しですが文章を変えさせて戴きました。

